

DEEP PURPLE

REPRODUCTION 2023



★ディープ・パープル★スケジュール★

8月15日(火) 大阪 フェスティバルホール PM6:30
主催●FM大阪



Universal Orient Promotions presents

8月16日(水) 大阪 フェスティバルホール PM6:30
主催●FM大阪

8月17日(木) 東京 日本武道館大ホール PM6:30
主催●フジテレビ



photo : JUNJI. NAKAMICHI

design : TAKAHIRO. NAKAJIMA

printers : MORIOKA. PRINTING

いかなる演奏展開を見せるか! DEEP PURPLE

音楽評論家 木崎義二

ディープ・パープルの名前からヒット曲「H USH」を思い出す人はあまりいない。そう、すでに4年近くも前のヒット曲であり、現在の彼らはあの頃の彼らではないからだ。

現在、ディープ・パープルといえばロンドンのロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラとの共演が話題になっている。たかがロック屋一であったはずの彼らが伝統あるクラシックのオーケストラと演奏を共にしたこと、新たな物語をかもしたことも事実だろう。

だがそのこと自体をクローズ・アップしてとやかくいうのはあまり好きではない。まず、ロックが現状打開の一手段としてクラシックに接近した事実、事実として受けとるとして、しかし、それだけで新しいロック状況を生み出したとはいえない。今に未知のものである。

それよりしまつにおえないのは、一歩がって演奏すべきロックが崇高なクラシックと共演できた、というロック屋の「ひがみ」みたいなものを前提として、共演を賞賛することだ。ロックという我々の音楽がそのようなとらえかたをされるのは悲しいことだ。クラシックと共演、ジャズを導入することによって、ロックが音楽として、どのように成長したかを見つめたいものである。

ディープ・パープルのロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラとの共演は、音楽関係以外の新聞でもかなり好評だった。ディープ・パープルといえば、イギリスで誕生したグループであるが、何故かイギリスでは認められず、まずアメリカで認められたグループであったが、アルバムにみる彼らはデビュー当時からクラシック音楽に興味をもっていた。アメリカのグループでクラシックへの接近で評判をとったヴァニラ・ファッジなどの影響もデビュー・アルバムに感じとることができる。

が、デビュー当時の彼らの音楽は、もっと自由な立場にたってクリエイティブなものであった。まあ、その頃からのクラシックの影響がわずかではあっても、それがやがて蓄積され、あのようなロイヤル・フィルハーモニックとの共演につながったのだらう。

彼らの来日が決定した時、ぼくは「ヘエ、ミスター・セイ・ザワが棒をふるのかい」と冗談をいったことがある。ディープ・パープルがクラシックとの共演のみで(?) 話題



になっていることに対する、せめてもの皮肉であったが、もちろん、今回のディープ・パープルの来日は、彼らだけの音楽を聞かせるのが目的である。ここで聞かせる彼らの音楽は、あくまでもロックをベースにしたディープ・パープルの音楽である。レコードだけでは知ることができなかったロック・グループ「ディープ・パープル」の姿をはじめてみることのできるのだ。

彼らはデビュー以来、オルガニストのジョン・ロードが中心である。クラシック・オーケストラとの共演も彼の作品を合同発表した形になっている。ディープ・パープルの音楽はジョン・ロードの音楽、といっても過言ではなからう。ジョン・ロードあつてのディープ・パープル、というわけだ。

彼らの音楽は作曲からアレンジまでやってのけるジョン・ロードによって、レコードでは、相当計算高いものをもっている。デビュー・アルバムでは、まだほんの実験にすぎなかった彼らも、アルバムがふえるにしたがって内容も充実されていった。と同時に、シングルを中心にしたヒット・ソング・グループのイメージをぬぐいさって、アルバムで聞かせるプログレシヴなグループへと成長していったのであるが、ヨーロッパやアメリカでのコンサートの評判を聞くと、ステージ上の演奏がアルバムと同種類の演奏——とは限らない。このへんが日本でのステージの楽しみのひとつになるだろう。

彼らが日本のステージでギンギラギンのロックを聞かせるか、緻密な計算にもとずいた音楽を聞かせるか、ステージを見るまではわからない。CCRみたいな50年代のロックン・ロールよ永遠なり、とばかり古いスタイルのロックン・ロールの演奏に終始するかもしれない。

が、彼らの演奏はジョン・ロードがいるかぎり、ステージでも水準高い音楽を聞かせてくれるものと思う。

クラシックのオーケストラと席をいっしょにするだけの演奏力を持ち、グループを離れて作曲家としてもなみなならぬ力をもつジョン・ロードのことだから、失望するような音楽を聞かせるはずはないが、生のステージにおける彼らの魅力は、やはりアドリブでいかなる演奏展開を見せるか、ということであらう。

ディープ・パープルの来日ステージに期待しよう!!

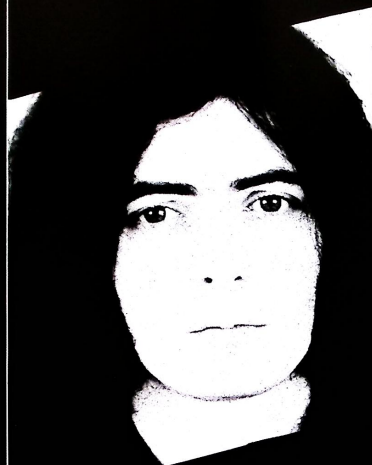
★メンバー紹介★



JOHN LORD

●ジョン・ロード

1941年6月9日レイチェスター生まれ。オルガン&ピアノ担当。19才のとき音楽界に入ったが、9才のときからアマチュアとして多くの催しものに参加して活動。シンガーとしてはポール・マッカートニー、作曲家としてはビートルズ、ザッパ、ショスタコビッチ、ヴォーン&ウィリアムが好きだという。ペットはフルージーという名の猫。6フィート半、グリーン色の瞳に茶色の髪という男性である。ディーブ・ハーブル以前はパーロフォン・レーベルに籍をおいていた。



RICHIE BLACKMORE

●リッチー・ブラックモア

1945年4月14日ウェストン・スーパー・メア生まれ。リード・ギター担当。14才のときこの世界に入った彼はクラシックを専攻していた本格派。シンガーとしてはジャック・ブルースにジミ・ヘン、ギタリストとしてはジミ・ヘンにジェフ・ベック、グループとしてはマウンテン、ジェスロ・タル、ユーライア・ヒープが好きだという。グリーン色の瞳に黒い髪、5フィート・11インチという彼にもペットがいて名前はストローチー、種別は大



IAN GILLAN

●イアン・ギラン

1945年8月19日、チヌウィック生まれ。ヴォーカル担当。15才のときローカル・グループに参加して音楽界へ入る。ジェス・サンダーとかムーン・シャイナーを経てディーブ・ハーブルに参加した。シンガーとしては初期のマービン・ゲイ、グループとしてはジェスロ・タル、ヴァニラ・ファッジ、クォーターマスが好き。6フィート・2インチ、灰色の瞳に茶色の髪。彼にも名なしの猫というペットがいる。



ROGER GLOVER

●ロジャー・グローヴァー

1945年11月30日サウス・ウォーレスのブリーコン生まれ。ベース・ギター担当、ホーン・シー・アート・カレッジ卒業後、本格的に音楽家を目指したが、活動を開始したのは15才のときから。1965年4月、フランクフルトのオスカー・クラブでスタートをきった。

シンガーとしてはイアン・ギラン、ポール・ジョーンズ、ジョン・セバスチャン、作曲家としてはバカラック&デイヴィット、ビートルズ、セバスチャンにジミ・ヘン、グループとしてはビートルズ、マウンテン、ジミ・ヘン、クォーターマスが好きだという。ペットは大きな目ざし時計。5フィート・9インチ、緑色の瞳に茶色の髪をしたこの男、名声を得た今でも絵かきに憧れているということだ。ディーブ・ハーブル以前はパイ、MGM、チャプター・ワン・レーベルに在籍していた。



IAN PAICE

●イアン・ペイス

1948年6月29日ノッティンガム生まれ。ドラムス担当。15才のとき音楽界に入ったが当時のことは忘れたそう。シンガーについては興味なし、作曲家やグループも同様。プレイヤーとしてはリッチー・ブラックモアとジム・サリバン、そして自分自身の名をあげている。5フィート・8インチ、ブルーの瞳に黒い髪の彼はベツトなし。すべてにドライでクールな生きかたをする男である。本名はイアン・アンダーソン・ペイス。

"ディープ・パープル"アメリカコンサートを観戦して



ディープ・パープルの公演を観た5日後、サンフランシスコのダウン・タウンにあるオリンピック・ホテルで湯川れい子姉御に逢った。

「ディープ・パープルみた?」

「ウン」

「どうだった?」

「すごくよかった。演奏もよかったけど、雰囲気よかった」

「ジョン・ロードちゃんは?」

「ウーン、よくみえなかった」

「エ?」

「イヤ、ギンギンでよく弾いてくれたけどライトが暗くて。でも、やっぱり、彼の音ってせまってくるね。実力あるよ」

「ほかには?」

「ギターもよかったな。でも、ひとことというなら、全部が夢みたいだった」

「????.....」

× × ×

コンサートの感想を聞かれて「夢みたいだった」と答える人はあまりいない。可愛い女の子ならともかく、こちからは30男だ。聞いたほうが面喰ってしまうだろう。

さては——いや、違うんだなあ。ディープ・パープルをみた6日後、同じ会場でのローリング・ストーンズのコンサートの時は、何故か「まわってきた」けど、ディープ・パープルの日は、何もまわってはいなかった。それよりも、正直にいっちゃえば、極度の睡眠不足による、「幻覚」のなかで、夢のようなコンサートがはてしなく展開されていたのだ。

ぼくがサンフランシスコ空港に着いたのは6月2日の夜8時半すぎだった。8時半といっても、現地の夏時間では、ちょうど日没の頃である。

出発前夜は原稿の整理でほとんど眠れなかったし、ハワイ迄のパナム便とハワイからシスコ迄のユナイテッド便のなかでは、水割をなめていたので、サンフランシスコに着いた時は、かれこれ50時間も起きっぱなしだった。普通の人なら、そのままホテルに入ってぐっすり寝こんでしまふところだが、ぼくの場合はちょっとかわっていた。

空港にはシスコ在住の吉成君（現在は日本に帰ってきている）と岡部君が車で迎えにきてくれた。そして、そのまま直行したのでコンサート会場のウィンターランド。

「疲れているでしょう」とくちではいいながら、ホテルにも寄らずに会場まで無理失礼(?)ひっぱっていった彼らは、とんでもなく親切なのか、それとも、ぼくの友人のなかで、もっとも悪いほうに入る友人なのか、ぼくは今だにわからない。

ウィンターランドに着いたのは、夜9時頃だったと思う。すでに前座は終わって休憩時間。このあとマロの演奏を経てディープ・パープルへと続き、夜中の1時頃、ステージは終了する。

× × ×

音楽評論家 木崎義二

ウィンターランドは千駄ヶ谷にある東京都体育館を小さくしたような長方形の会場で、フロアと四方の観覧席に客を入れる。満席で5千入ぐらいだそう。

当日もほぼ満員だったから、4千5百人ぐらいは入っていただろう。

ぼくは望遠等の交換レンズを入れたカメラ・バッグを肩にぶるさげて会場入りとした。とたんに背の高い黒人の警備員につかまってしまう。

「バッグの中身はなんだ」

一瞬カメラのセット、というとしたが、バカ高いカメラのセットをとりあげられ、そのまま戻ってこなかったらどうしよう、と考えるくちもってしまう。

今度は、バッグをあけろ、ときた。こうなったらどうしようもない。バッグをあける。中のぞきこんだ警備員は「ノー・アルコール」といいながら、そのままバッグを返してくれた。

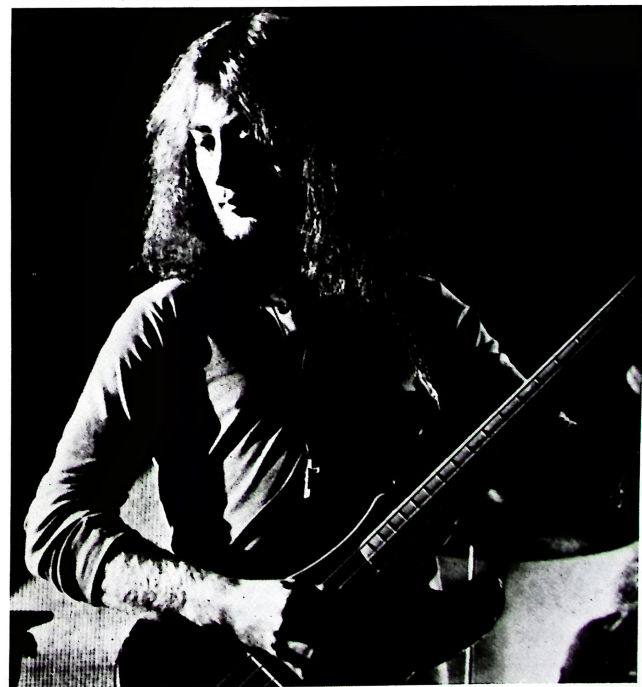
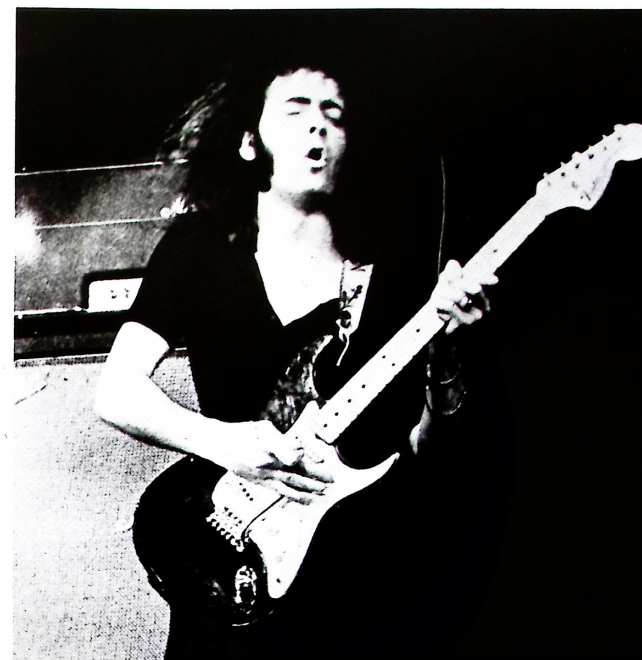
日本では素人カメラマンの入場は何故か厳禁になっているが、アメリカではフリー・パスなのだ。そのかわり、絶対やかましいのが酒類。警備員はぼくのバッグのなかに、酒がつまっているのではないかと、思ったらしいローリング・ストーンズやジェスロ・タル、イーグルスのコンサートなども、カメラは堂々とつめて入れたが、ボディ・チェックまでしてうるさく目を光らせていたのは、酒とテープ・レコーダーだった。ストーンズの会場入口では、目の前で酒瓶をたたきられるシーンがあったらしい。

アルバムではサンタナ以上にラテン色が強いマロも、生のステージではロックの要素のほうが強かった。はじめは長身の長髪族に圧倒されておとなしくしていたぼくも、しだいに元気をとりもどし、カメラをかかえてステージ近くまでノコノコ出かける。踊り狂っている奴、興奮しすぎてぶったおれ、ショウも見ず外へかつぎだされる奴、音楽などまったく関係なく(?)、エンエンとベッタリ、キッスをしている奴、全員たちががっているフロアで、長々と寝ている奴、ステージのミュージシャンに見えるように、最低限の衣を身につけて手をふっているグルービー族、シャッターをパチリパチリきっている、ぼくと同様のおのぼりさん(但し、ぼく以外のカメラ族はアチラの方)、等々、ロックのコンサートには、若者のさまざまな姿がある。

そんなわけで、9時から1時までの4時間ぼくはただただ夢のなかをフワリフワリとさまよっていた。ぼくにとっては、ほんの数分間の夢のなかのでござってであった。

リザーヴェーションなしのホテルにチェック・インしたのは、夜中の2時頃だった。

8月17日は充分睡眠をとったあとで、武道館にでかけよう。しかし、今度はミュージック・コメンテーター&取材フォトグラファーとして、マジな顔してでかけることだろう。



ディープ・パープル雑感

音楽評論家 湯川れい子

日本の知的文化人と呼ばれる人達の中には、横文字を好きなのがやたらに多い。だからそういう人達が、二、三人でやっている座談会の記事などを読む時は、英語とフランス語の辞典を用意しなければならないのです。

「このサイバネティック・エイジにおけるリリシズムというのは、過去のウエットなカルチャーに対して、シンメトリックな関係にあるわけでしょう。或る意味ではドライで、インパースナルな、メカニカルなリリシズムといえるね」

「いや、むしろそれは、エスタブリッシュメントからのエスケープであって、決してエモーションなものじゃないよ」

なんていうと、いかにも頭が良さそうに感じられるから不思議なものです。

つまり、「難解」と「高尚」とは、日本の場合、しばしば同義語として通用するということなんです。ロックにおいても又しかり、あんまりサッパリとしてスッキリとして解りやすいと、とかくバカにされる。ディープ・パープルなどは、その良い例です。

不当に評価されているグループを挙げよ、といわれたら、私はまず先にこのディープ・パープルを挙げるでしょう。どうしたわけか、日本では、ディープ・パープルを高く評価する人達が少ないのです。それでいて、彼等のレコードを、どれだけ聴いているかというと、せいぜいが「ブラック・ナイト」や「ストレンジ・ウーマン」「ファイヤー・ボール」のシングル盤くらいで、それもラジオからチラチラ流れてくるのを、小耳にはさんだ程度。「イン・ロック」や「ディープ・パープル/ロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラ」や「ファイヤー・ボール」のアルバムA・B面を、ジックリと聴いたという人は、驚くほど少ないのです。

日本の知的文化人が、横文字をバカみたいに使うというのは、もしかししたら、敗戦によって植えつけられた、いじましい劣等感からくるものかも知れないと考えてみる必要があります。それというのも、だいたいこの傾向は、40才以下の人に多いから。

被占領国の、哀れな西洋コンプレックス。そして、ロックに関しても、いや、西洋文化全般に対して、私達はやっぱり被占領国なのかも知れません。なぜなら、自分の本当の耳や眼、皮膚感覚で、それらのものを独自に評価しようとは、決してしていないからです。

例えば、あの「音楽」とはどうてい呼べないような、GFRの狂騒に狂った連中が、箱根にピンク・フロイドを聴きに行き、シラケて帰って来るといふ現実。

ピンク・フロイドは、そもそも箱根のような、音響条件の悪い野外で聞けるグループ

じゃないし、乗るために聞くグループでもない。そんなことは、レコードを一枚聴けば判る話です。だから、彼等を本当に聴きたいのならば、汽車賃を払ってでも、大阪のフェスティヴァル・ホールまで行くべきでしょう。

そして又、アンコールをやらないで、一時間あまりでサッと舞台を引きあげてしまったCCRに対して、ブツブツと文句をいう。連中が汗みどろで、本当に真剣に、あれだけの素晴らしい演奏を聞かせてくれても、時間というケチな粹で計ろうとする。「何を聞いているのかなあ」と、疑問に思ってしまう。こういう現象は、もしかしたら日本だけなんじゃないかしら？。うんと高尚な感じがするから、あるいはヘタでも良いから、バカ乗りさせるような、気狂いじみた音響で、これでもか！とばかりにやるのが良いと信じていて、決して自分の「耳」で評価しようとはしない。つまるところ、ロック、ロックなんていって騒いでいても、本当はロックを心から楽しんで理解している人達は、実に少ないんだという事なんです。

でなければ、ディープ・パープルの評価が、これだけ低くて、大人のファンが少ないということも、うなずけないでしょう。

彼等が、ロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラと共演した盤は、失敗作だという人達が多い。たしかに、それ一枚だけを取り上げて、ロックとしての観点から評価したら、そういうこともいえるかも知れません。しかし、彼等のデビュー・アルバム「シエズ・オブ・ディープ・パープル」から聞いて、三枚目の「ディープ・パープル」、そして、五枚目の「イン・ロック」の間にあるものとして、このアルバムを聴いたなら、評価は全然違ってくるはずだ。

彼等の場合は、単純なバブルガム・サウンド的なロックから出発して、次第に難解なものに移行していったわけじゃない。むしろまったく逆で、LSDを示唆するそのグループ名からも解るように、非常に格調の高いサイケデリックな音楽から出発して、自分達の行く手にあるものと、次々と大胆に、勇敢に取り組みながら、「インロック」の、あの得もいわれぬ簡潔な歯切れの良さに到達して、現在に至っているのだと理解する時、初めて彼等の奥行きが広さと深さに、瞠目するに違いないと私は思うのです。

例えば、アルバム「ファイアー・ボール」の中の、「ノー・ノー・ノー」なんか 私はしびれてしまう。グレートフル・デッドにも通じる。この気持の良い気だるさ。さりげなき。これはよほどの実力の裏打ちがなければ、出せない味わいです。

彼等は、一枚一枚のアルバムごとに、余分な贅肉を取りのぞいて、すっきりと引き締まってゆく。その小気味良さというのは、ちょっと他のグループには無いものであって、リッチー・ブラックモアのギターは、だんだん冴えてくる。聴くごとに、歌っていく。叫んでいたのが、ハミングに変わってゆく。その空間の遊びが、たまらないのです。

そして又それは、ジョン・ロードのオルガンについても言えるし、イアン・ペイスのドラムスについても言えることでしょう。

それに付いても、ディープ・パープルという、「ブラック・ナイト」と「ファイアー・ボール」だと思われてしまうというのは、どういふことなのでしょう。ディスコティックあたりで、気軽に踊るのに一番良いレコードであって、本気で観賞するには値しないなどと、漠然と決めつけてしまっている人達があまりにも多い。

結局、このことは私が最初に書いたように、西洋文化全般に対する日本人のあの実に不可思議なコンプレックスと、一脈通じるものがあるという気がしてならないのです。

実のところは、何も自分の手では触っていない。何も自分の耳では聴いていない。観念というバケモノで、西洋文化を見たり、聞いたり、評価したりして、ほんの薄皮一枚のところ、左右の動向にキョロキョロと横目を使いながら、隔たりハネたりしている。

これはいい過ぎでしょうか。お前さんだけが判ってるふりをな/と叱られてしまいそうですけれど、本当に不思議で仕方がないんだからご免なさい。これは、たとえばディープ・パープルをひとつの例にとつての、私の日頃の雑感なのです。そして、「高尚」と「難解」とが、まるで関係のない言葉であるように、「狂騒」と「ロック」もまるで関係なく、「明快」と「雅拙」も、まったく別の意味を持つ言葉なのだといたった私の気持を、ご理解いただければ嬉しいと思います。



IAN

DEEP PURPLE



DEEP PURPLE

待っていた“ディーブ・パープル”

ミュージックライフ 編集長 星加ルミ子

ディーブ・パープルを悲劇のグループといったら言い過ぎかもしれないが、昨年アメリカでコンサートを行っている最中、ベース・プレイヤーのリッチー・ブラックモアが病に倒れ、アメリカ一周公演を途中で切り上げイギリスへ戻った。今年の春、ばん回するために再度アメリカでのコンサートを行い、又もや途中で、今度はこのグループの人気ヴォーカリスト、イアン・ギランが、急性肝炎で動けなくなり、又もキャンセルせざるを得なくなったのだ。そしてやっと3、4月に残りの都市を回って無事3度目の正直となった話だが、アメリカはどうやら鬼門らしい。日本公演も今年の5月に予定されていたのだが、イアン・ギランの病が治る迄ということで余儀なく延期され、今回の来日の運びとなった訳だ。病には勝てない言葉通り、度重なる不運に見舞われているディーブ・パープルには、何となく悲劇のグループと名付けたくなる。

ヘビー・ロック・グループとしてのパープルは、イギリスでは、ツェッペリン、フーにも匹敵する人気グループだが、日本では前者より数歩遅れをとってしまった。しかし表立ってはいないが、彼等のファンは多い。ドライブのきいた演奏と、イアン・ギランのパワフルなヴォーカルは、このグループ独得の魅力を支えている。又、イアン・ギランは、ロック・オペラ“スーパースター”のキリスト役で、溢れ ばかりの才能を発揮し、この成功に気を良くして一時はディーブ・パープルを脱退するのではないかという噂まで出た程だ。しかし、今度はイアン・ペイスとリッチー・ブラックモアの2人が抜けるという情報が入ったりで、ファンにとってディーブ・パープルは、波乱万丈なあまり、いつもドキドキさせられるグループである。

イアン・ギランに人気の点では遅れをとっているが、リッチー・ブラックモアのギターも、このグループでは聞き逃せない重要なものだ。特に、D・パープルが他人の作品のアレンジから、オリジナルのハード・ロックに変わって来た頃から、彼のギター・プレイにはますます磨きがかかってきたようだ。今やジミー・ペイジ、エリック・クラプトン、ジェフ・ベックに続く、ギタリストとして高い評価を受けている。

最後に、このグループのリーダー、ジョン・ロードは、先日来日したE.L.&Pのキース・エマーソンの派手なアクションに対して、イギリスの重厚な伝統そのままのクールなオルガン・プレイをきかせ、それがグループの大きな特色ともなっている。グループ名そのままの“紫の煙”の如く、華麗で洗練したジョン・ロードと、熱い炎を思わせるイアン・ギランという、正反対の二人が見事なまでにぶつかり合う姿は、まさに壮観である。

ドラマーのイアン・ペイスが「俺達のグループは、ベスト・ミュージシャンの集りだ」と語っているように彼らの自信の程を、あなたのこの目で、耳で実際に確かめていただきたいと思う。



★ディープ・パープル[レコード解説]



●ディープ・パープル・イン・ロック

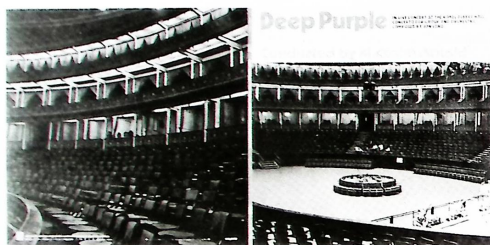
ディープ・パープルの全作品を通じて、最高傑作と賞われている、史上まれなハード・ロックの名盤。これは前作のロイヤル・フィリハーモニック・オーケストラとの共演によるクラシックを素材にしたアルバムとは180度趣を異にし、ハード・ロックの真髄を聴かせてくれる。このLPの発売に関しては、前作との対比などによって色々な話題をよんだ。「グッド・ゴリィー・ミス・モリー」、「トゥッティ・フルッティ」、「ルシール」などトリル・リチャードのロックン・ロール・ナンバーをヴァリエーションとして取り上げた「スピード・キング」でアルバムは始まる。

これは、ディープ・パープルのグループとしてのサウンドや生き方の決定づけを示しているようだ。また、強烈な個性をもった屈指のギタリスト、リッチー・ブラックモアに対する評価、認識も高くなった。名ギタリストの多いイギリスの中でも5本の指に入るとさえ言われている。とにかくこのLPの成功により、ディープ・パープルは、No.1のハード・ロック・グループとしての地位を確立した。

ワーナー・バイオニア 加藤正文

●ファイア・ボール

このアルバムからは2曲「ファイア・ボール」と「ストレンジ・カインド・オブ・ウーマン」のシングル・ヒットが出ている。前作「ディープ・パープル・イン・ロック」の延長線上にあるが、アルバム作りの上で変化が見られる。次の「マシン・ヘッド」にいたる機微的内容を持っており、曲づくりの上での変化が目立つ。A面には先にあげたヒット曲をはじめ曲想の異なるものが収められており、B面では彼らの演奏に比重をかけたものが収められている。この姿勢は「マシン・ヘッド」にもあらわれる。それと、ギターとオルガンのコンビネーションというが、使い方がうまくなっているのも注目する。前作「イン・ロック」で強烈に打ち出したハード・ロック・グループとしての姿勢を、このアルバムの発表によって確立した。レコードのジャケットに5人が一丸の火の玉となって飛んでいる奇妙な感じのイラストがあるが、アルバム・タイトルとグループのイメージを見事にオーバー・ラップさせており、71年度N.M.E.誌のレコード業界に対するアワードのベスト・デザインドLPカバーの1位に選ばれた。



●ディープ・パープル／ロイヤル・フィリハーモニック・オーケストラ

それまでの専属だったテトラグラマトンを離れ、ワーナーと契約して発表した1枚目のアルバム。このアルバムは、当時のロック界に大変な波紋を投げかけた。それは、目下に進出するロック・ミュージックが、その性格上、必然的にジャズとの接近が問題にされているところへ、ディープ・パープルが今まで誰もやらなかった、クラシック・ミュージックを取り上げ、クラシックの、名高いマルカム・アーノルド指揮によるロイヤル・フィリハーモニック・オーケストラと共演し、その上オルガニストのジョン・ロードが全スコアを作曲するという技をやったのけた。この事の重大さは当時の新聞、雑誌による報道が如実にあらわれており、そのほとんどが彼等を絶賛し、まさにロックの新しい開きを感じさせる。このエポック・メイキングな出来事を派手に扱っていた。大編成オーケストラとディープ・パープルのサウンドは、音の流れの中で交錯し、ジャンルを超すドラマティックな世界を創造した。ロイヤル・アルバート・ホールに集まった聴衆は熱狂し、ジョン・ロードの才能とディープ・パープルの英雄的姿に酔いしれた。このコンサートの様子はフィルムに収められており、オーケストラに囲まれ、全員が少し緊張しながらも堂々と自分たちのプレイをする姿は、ディープ・パープルの、さらには、ロック・ミュージックの確かな音楽性を再確認させ、また無限の可能性を離れその手中におさめていく恐るべきエネルギーを見せつけてくれる。

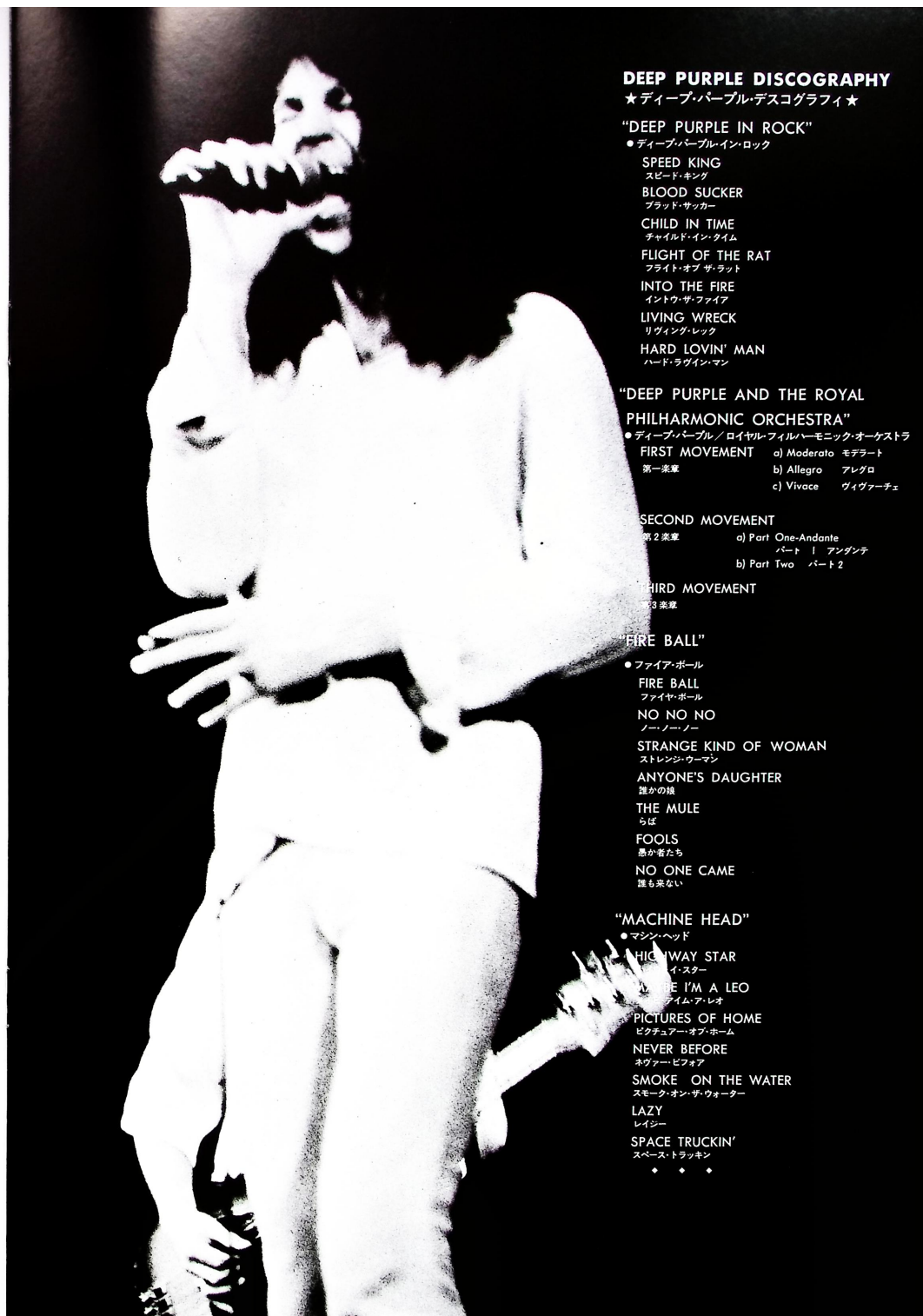
なお、彼らはワーナーへ移籍してメンバー・チェンジを行っている。リード・ヴォーカルにはイアン・ギランがロッド・エヴァンス（キャプテン・ピコンドというスーパー・グループを結成して活躍中）にかわって、ベースにはロジャー・グロバーがニッキー・シンバーにかわって加入した。



●マシン・ヘッド

'72年春に発売された最新アルバム。このアルバムは、ディープ・パープルにとって、「イン・ロック」と並ぶ傑作とされるもので、大変まとまった、ほぼ完璧と言っても過言ではないサウンドでうめられている。レコーディングはスイスのモントリューにある湖のほとり、有名なローリング・ストーンズの移動式スタジオ「モービル・ユニット」を使って行われた。ジャケットを開けると内側に、レコーディングの風景とその風景(?)写真がのっており、B面の「スモーク・オン・ザ・ウォーター」ではこのレコーディングの事を曲にとり入れている。スイスでレコーディングしたのは、体の悪いイアン・ギランの病氣療養もかねてのことらしい。

さてこのアルバムにきかれる彼らのサウンドは、今までのディープ・パープルになかった面もかなり多く表われておりフリーのようなスタイルのグループとも少し共通する面を持っている。リッチー・ブラックモアのギターが相変わらずきいており、随所にオーバー・ドライブしてのギター・ユニゾンが効果的に使っている。ジョン・ロードのオルガンのアドリブの完成度かなり高いものになって出ている。とにかく計算されきった、無駄のないアルバムと言える。イギリスでは発売と同時にヒット・チャートをかけ昇り、ニール・ヤングの「ハーヴェスト」を一時おさえてトップになった。なおこのアルバムからは、「ネヴァー・ビフォア」と「ハイウェイ・スター」の2曲がシングル・ヒットしている。



DEEP PURPLE DISCOGRAPHY

★ディープ・パープル・ディスコグラフィ★

"DEEP PURPLE IN ROCK"

- ディープ・パープル・イン・ロック
- SPEED KING
スピード・キング
- BLOOD SUCKER
ブラッド・サッカー
- CHILD IN TIME
チャイルド・イン・タイム
- FLIGHT OF THE RAT
フライト・オブ・ザ・ラット
- INTO THE FIRE
イントゥ・ザ・ファイア
- LIVING WRECK
リビング・レック
- HARD LOVIN' MAN
ハード・ラヴィン・マン

"DEEP PURPLE AND THE ROYAL

PHILHARMONIC ORCHESTRA"

- ディープ・パープル／ロイヤル・フィリハーモニック・オーケストラ
- FIRST MOVEMENT a) Moderato モデラート
第一楽章 b) Allegro アレグロ
c) Vivace ヴィヴァーチェ

SECOND MOVEMENT

- 第2楽章 a) Part One-Andante
パート1 アンダンテ
b) Part Two パート2

THIRD MOVEMENT

- 第3楽章

"FIRE BALL"

- ファイア・ボール
- FIRE BALL
ファイア・ボール
- NO NO NO
ノー・ノー・ノー
- STRANGE KIND OF WOMAN
ストレンジ・ウーマン
- ANYONE'S DAUGHTER
誰かの娘
- THE MULE
らば
- FOOLS
愚か者たち
- NO ONE CAME
誰も来ない

"MACHINE HEAD"

- マシン・ヘッド
- HIGHWAY STAR
ハイスター
- WHEN I'M A LEO
タイム・ア・レオ
- PICTURES OF HOME
ピクチャー・オブ・ホーム
- NEVER BEFORE
ネヴァー・ビフォア
- SMOKE ON THE WATER
スモーク・オン・ザ・ウォーター
- LAZY
レイジー
- SPACE TRUCKIN'
スペース・トラックイン

★ ★ ★

ユニバーサルラインアップ'72

●お問い合わせ(585)3045

DUSTY SPRINGFIELD

★ダスティ・スプリングフィールド

8月22日(木)PM6:30 東京厚生年金会館大ホール

S ¥2,600 A ¥2,100 B ¥1,600

JAMES GANG

★ジェームズ・ギャング

9月22日(金)PM6:30 東京・神田・共立講堂
9月24日(日)PM6:30 東京・新宿・厚生年金会館
9月25日(月)PM6:30 大阪・フェスティバルホール
9月26日(火)PM6:30 東京・新宿・厚生年金会館
9月27日(水)PM6:30 東京・渋谷公会堂

S ¥2,700 A ¥2,200 B ¥1,600



THE 4th NEWPORT JAZZ FESTIVAL

★第4回ニューポート・ジャズ・フェスティバル

10月2日(月)PM6:30 東京厚生年金会館大ホール

☆キャンボール・アタレイ・クイント、ジミー・スミス ジャムセッション

10月3日(火)PM4:00 / PM7:00 東京厚生年金会館大ホール

☆第1回: ティン・ブルーベック・トリオ・ジャズ・マリガン・ポール・ディズモンド

☆第2回: ティン・ブルーベック・トリオ・ジャズ・マリガン・ポール・ディズモンド、キャンボール・アタレイ・クイント

10月6日(金)PM6:30 大阪フェスティバルホール

☆キャンボール・アタレイ・クイント、ジミー・スミス ジャムセッション

10月9日(月)PM6:30 東京日比谷公会堂

☆キャンボール・アタレイ・クイント、ジミー・スミス ジャムセッション

入場料(東京公演) S ¥3,000 A ¥2,500 B ¥2,000

10月3日(火) 第1回のみ S ¥2,800 A ¥2,300 B ¥1,800



ADAMO

★アダモ

11月6日(月)PM6:30 東京厚生年金会館大ホール

11月7日(火)PM6:30 東京厚生年金会館大ホール

11月8日(水)PM6:30 東京渋谷公会堂

11月9日(木)PM7:00 横浜文化体育館

11月17日(金)PM6:30 東京厚生年金会館大ホール

11月18日(土)PM6:30 東京厚生年金会館大ホール

11月19日(日)PM6:30 東京日比谷公会堂

11月20日(月)PM6:30 大阪フェスティバルホール

11月23日(木)PM6:30 東京渋谷公会堂

S ¥3,500 A ¥2,500 B ¥2,000 C ¥1,500



MICHELE LEGRAND

★ミシェル・レグラン・グランドオーケストラ

10月18日(木)PM6:30 東京厚生年金会館大ホール

10月22日(日)PM6:30 大阪フェスティバルホール

10月26日(木)PM6:30 長野市民会館

10月29日(日)PM6:30 東京郵便貯金ホール

S ¥3,500 A ¥2,800 B ¥2,200 C ¥1,800

T.REX

★T・レックス

11月28日(火)PM6:30 東京日本武道館大ホール

11月29日(水)PM6:30 大阪厚生年金会館ホール

11月30日(木)PM6:30 大阪厚生年金会館ホール

★★NOWな六本木・新宿のコンダクター ロック エクスプロージョン★★

衝撃のニュー・ロック



■イタリアバンド出演

ファンタスティックな六本木の夜を盛り上げ Love Roman の世界からミスティックな美しさを大切に演出します

FASHION DISCO

plus one 男性 ¥1,200
女性 ¥1,000

397 POPPONGI TEL 408 9256

■愛とファッションと自由への招待

シックなファッションとポップなパターンの美しいハーモニー
そしてサウナサウンドノ

FASHION DISCO

castelle ドリンク・フード
¥300より

5F POLE STAR BLDG 16-15 KABUKICHO SHINJUKU TEL 208 0808

■英国バンド出演

ファンタスティックな夜を盛り上げるニュー・ビートル、生きる事を楽しむ時代を
切り開こうとする今、クレイジー・ホースはあなたに愛と美の鼓動を捧げます

DISCO CLUB

Crazy Horse 男性 ¥1,300
女性 ¥1,100

318-12 POPPONGI TEL 582 6886

■ヒリピンバンド出演

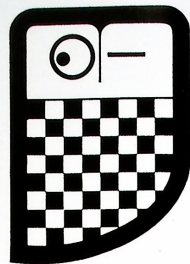
アクション・ナンバー1 期待するシンギング・サウンドノ
そしてソウル・レイヴン・ロック・スタディ、コー・クレイジー・ホース

GO GO PLAZA

CRAZY HORSE 男性 ¥1,200
女性 ¥660

5F MONAMI BLDG KOMA THEATER SIDE SHINJUKU TEL 208 6988

Our Soul in Hard Rock



Guy with
Nice Magazine

WEEKLY
平凡ペンチ

WELCOME
DEEP PURPLE



●ポップ・ジュネレーションのための... ミュージック・ライフ

MUSIC LIFE

■毎月20日発売・定価 ¥ 300

■特別付録：ジェームス・テイラー&ローラ・ニーロカード
秋に來日するこの二人の魅力を結集した入場券型のカッコいいカード。

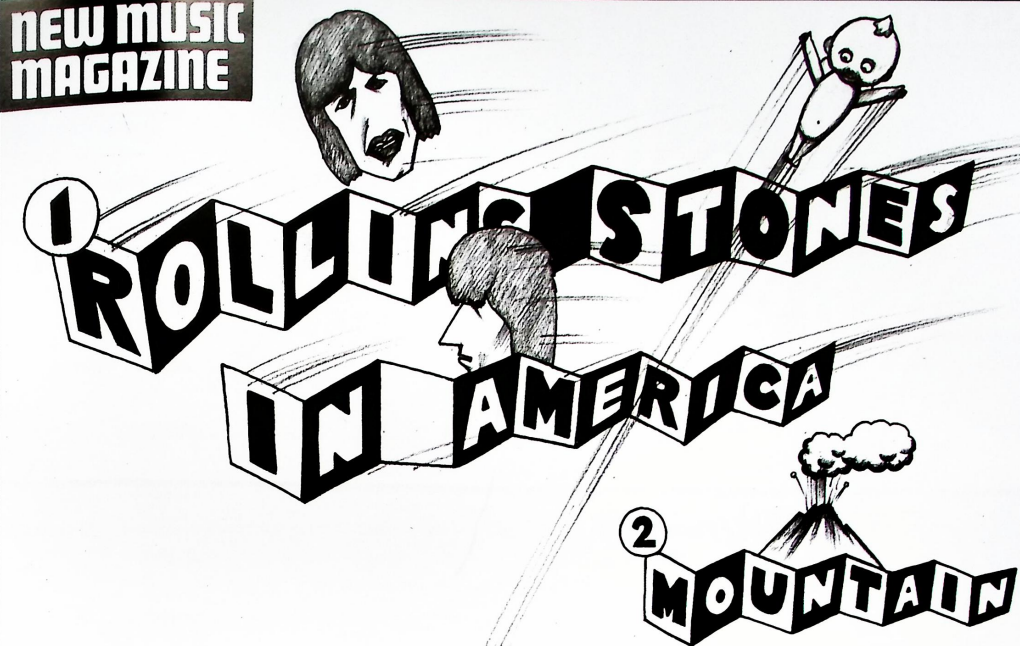
9月号予告

●本誌記者、東郷かおる子、木原紀子、アメリカ、イギリス取材旅行記/アメリカ、イギリスのトップ・ミュージック・シーン会見記やニュースが盛り沢山。

●EL&P、ジェスロ・タル、フリー・バンド、グレイ・フリー・バンド、1問1答のインタビュ、プライベート・タイム、コンサート等の来日した彼らのすべてを公開！
●第3期現代トップ・ミュージック・シーン(ペーシストの巻)...ジャック・ブルース、ジョン・ポール・ジョーンズに代わるこれからのロック界を背負うペーシスト達。

▶発行 ミュージック・ライフ

new music
MAGAZINE



8月号 210円

ニューミュージック・マガジン社 東京都渋谷区本町5丁目9-17 電話 03-461-7454

世界のステージに選ばれる



東の国のイメージネーションを求めて——
迫力のニュー・フェイス近日登場



Vibrosonic Reverb.

- ワイド、レンジを要求するジャズ・ギター奏者、スチール・ギター奏者のために設計されました。
- 38cmプロフェッショナル・シリーズ・スピーカー
- 平均出力100w 最大出力220w
- リヴァーブ・ヴィブラート/2チャンネル
- マスター・ボリューム・コントロール付 ¥310,000



The All New Bassman 100

- ベース・サウンドの新境地を開く特別設計
- 30cmヘビー・スピーカー×4
- 平均出力100w 最大出力220w
- 2チャンネル
- マスター・ボリューム・コントロール ¥300,000

あふれるパワーと豊かな音色で、プレイヤーのソウルをあますところなく語りつくすニュー・モデルです。

Let's drive-together72

学生17バンドによる第3回

ビッグ・バンド・ジャズ・コンサート

●9月3日(日) PM12:00開場 PM12:30開演

●日比谷公会堂

ゲスト/森寿男とブルー・コーツ

宮間利之とニュー・ハード

今泉俊昭とジ・アウト・レイジャーズ

司会/いっしょでルラ

入場券 ¥600 山野本支店にて好評発売中です。

☆バークレー・コンボ譜面入荷!!

カタログ・詳しいお問い合わせは
フェンダー・日本総代理店

山野楽器
銀座4丁目 (562) 5051

NATIONAL

MAC

RQ-447 標準価格 29,800円
（本体25,700円、テープ7,000円、イヤホン1,200円、充電器500円）
デジタルパルス同期方式 テープ・リ・マ・ク

※世界に伸びる技術のナショナル



録音1ショット1/2秒。 「ぶっつけ本番」録音機

■深夜録にもってこのスリープ機能をプラス
録音しながら眠ってしまっても安心！テープが終
ると自動的にメカもラジオも止めてしまう便利。

■電池・電灯・カーバッテリーの3電源方式
屋外や停電の時は電池！室内では電灯の100
ボルトで！アダプタ（別）を使えば自動車の中でもOK。

■便利な3けたのテープカウンターつき
録音の時、録音内容とカウンターの数字をメモし
ておけば、録音場所の探し出しが簡単になる。

■1つで3役！マニア好みの大形インジケータ
電池のチェックや録音のレベル、電波の同調指示
と3ウェイのインジケータ。大形で見やすい！

Deep Purple

ディープ・パープル

いま、目の前で炸裂する紫の衝撃！



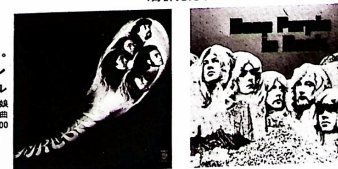
壮絶／驚愕／爆発！
充実／最高／心酔！……
マシン・ヘッドの話題はつきない。

■マシン・ヘッド

ディープ・パープル

ハイウェイ・スター／マイヒー・アイム・アレオ
ピクチャー・オブ・ホーム／ネヴァー・ビフォー／スモーク・オン・ザ・ウォーター
レイジー／スペース・トラックス全7曲 P-8224 ￥2,000
〈好評発売中〉

〈好評発売中〉



全世界の若者を興奮のルツボに叩き込んだ驚異のアルバム。

■ファイアボール

ディープ・パープル

ファイアボール／ノー・ノー／ノーストレンジ／ウーマン／誰かの娘
らば／黒い電灯／誰も来ない全7曲
P-8092 ￥2,000

とぎまされたサウンドが爆発する彼らの傑作。

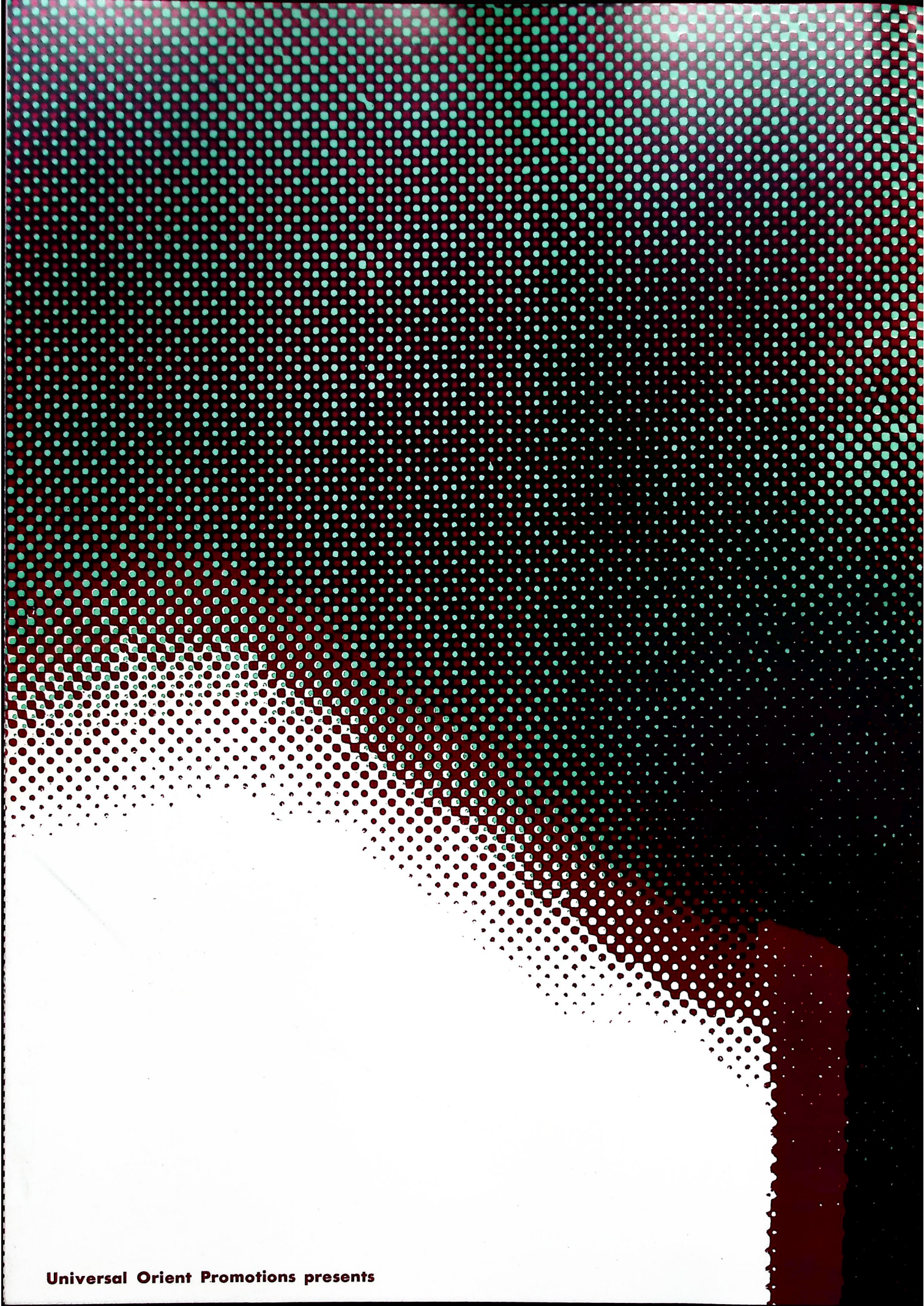
■ディープ・パープル・イン・ロック

ディープ・パープル

スピード・キングダム／ブレイク・オブ・ザ・マシーン／イン・ザ・タイム
フライト・オブ・ザ・ワゴン／サム・タイム・ザ・ファイア
リヴィング・レック／ハード・ワゴン／ヤン全7曲
P-8020 ￥2,000

WB IAS E

ワーナー・パイオニア株式会社



Universal Orient Promotions presents